

## Alliance for Global Sustainability (AGS)と私との関わり

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻

加藤浩徳

AGS<sup>1</sup>との関わりは、私の研究者人生に大きな影響を及ぼしたといっても過言ではありません。ここでは、AGS プロジェクトが私に与えた影響を、3つに分けてお話ししたいと思います。



1つめは、「サステナビリティ」への関心です。AGS プロジェクトに最初に関わったのは、私が専任講師として大学に戻ってきた頃（2001年頃）だったのではないかと記憶しています。手元にある資料をひもとくと、2002年1月に「サステイナブル・モビリティ」に関する国際シンポジウムが開催されたとの記録があります。小宮山宏先生（当時東京大学工学部長）、太田勝敏先生（東京大学都市工学科教授）のご講演や、MITのAndreas Schäfer教授、Ralph Gakenheimer教授（Department of Urban Studies and Planning, MIT）が招へいされたようです。（「ようです」という曖昧な言い方をしているのは、シンポジウムの企画段階までは私も関わっていたのですが、ちょうどシンポジウムの開催された日は、3ヶ月ほどドイツ・ダルムシュタット工科大学に滞在していたので日本にいなかったためです。）当時は、まだ、私の中ではサステナビリティという言葉があまりなじんでいなかったのですが、その複雑かつ奥深い概念を印象づけたのは、AGS プロジェクトにおける白熱した議論でした。関係する先生方と持続可能性にかかわる多様な観点からの議論を重ねていくうちに、サステナビリティの考え方は徐々に私の脳みそ深くに浸透していきました。その結果、サステナビリティは、私の研究テーマの中心にこそならなかったものの、頭の片隅に居座り続けることになっていきました。事実、それはいろんな形で陰に陽に現れて、結局、15年以上も研究を推進する上での重要なトピックであり続けることとなります。例えば、その一つは、村松伸先生（東京大学生産技術研究所）とともに行った「メガシティとサステナビリティ」に関するプロジェクトです。このプロジェクトでは、環境経済学者、農学研究者、都市研究者、歴史学者など多様な背景を持つ研究者らと深いレベルで都市におけるサステナビリティのあり方について議論を行いました。そうしたタフな議論のできる思考体力を作ってくれたのは、紛れもなくAGS プロジェクトでの経験でした。もう一つの例は、現在も私がかかわっている、ベトナム・ハノイにおける日越大学設立プロジェクトです。この

---

<sup>1</sup> AGSとは、人類の持続的発展という目標に向かって、世界一流の知能を備えた4つの大学—東京大学、マサチューセッツ工科大学（MIT、米国）、チャルマーズ工科大学（スウェーデン）、スイス連邦工科大学（ETH、スイス）—が協力して研究を行う人間地球圏の存続を求める大学間国際学術協力のこと。

大学は、サステナビリティ教育を看板の一つとして掲げており、古田元夫学長（元東京大学副学長）や福士謙介先生（東京大学未来ビジョン研究センター）らと、サステナビリティの概念を開発途上国の研究者や学生に伝えるために日々努力しています。そして、その素地は紛れもなく AGS プロジェクトにて培われました。



2 つめは、私自身の国際的な活動への影響です。AGS の総会やプロジェクトの打ち合わせなどに参加するために、米国・ボストンの MIT、スイス・チューリッヒの ETH、あるいはスウェーデン・ヨーテボリのチャルマーズ工科大学のキャンパスを訪れる機会を何度かいただきました。まだ研究者になりたての若造で、目指すべき研究者像がはっきりしていなかった時期に、海外トップ大学の著名研究者の方々と交流し、研究者の生き様や国際共同研究の現実を垣間見ることができたことは、その後の私の研究の方向性や、研究・教育上での国際的視野を広げる上で強い刺激となりました。例えば、MIT の Lawrence Susskind 教授（Department of Urban Studies and Planning, MIT）と都市計画のあり方を議論したときには、その思考の深さとダイナミズムに自分の脳みそがえぐられるような衝撃を受けたことをはっきり記憶しています。また、東大で行われた AGS プロジェクトのミーティングにおいて、研究費の話になったときの MIT や ETH の先生方の議論の激しさは、今でも心に残って頭から離れません（当時の私の拙い英語能力でも、研究内容の話については議論についていけていたのですが、研究費の話になった途端に、英語のレベルが急激に上がり、婉曲的な表現が多用されて会話のモードが急変した様子に衝撃と戸惑いを感じたりしました）。また、その後、2005 年からはご縁もあって ETH チューリッヒ校の Kay Axhausen 教授（Department of Civil, Environment and Geomatic Engineering, ETH Zurich）のところに 1 年間サバティカルで滞在する機会を得ました。その際には、AGS プロジェクトでお世話になった ETH の Roland Scholz 教授（Department of Environmental Systems Science, ETH Zurich）のご自宅に家族でご招待いただいたりしたのは今となっては大変良い思い出です。私が、現在国際プロジェクトに関心を持ち、多くの国々の研究者や実務者と仕事をするようになったのも、少なからずこのときの国際的なコミュニケーションの経験が影響しているのかもしれない。



3 つめは、学際的な研究志向の醸成です。私は、もともと土木工学において交通計画・政策を専門とする、かなり狭い思考スコープを持つ一介のエンジニアにすぎませんでした（今でもそうかもしれませんが）。しかし、AGS プロジェクトを通じて、サステナビリティという学際的な概念と、多様な学術的背景を持つ研究者との交流に「巻き込まれた」結果、多様なディシプリンの存在とそれらの関係性、さらにはその融合の重要性と困難さを否応無しに身をもって知ることになりました。その一方で、学際研究の楽しさも知るきっかけにもなりました。社会的意思決定や合意形成に関して長年にわたり共同研究をすることとなった城山英明先生（東京大学公共政策大学院教授）と出会ったのも AGS プロジェクトがき

っかけでした。城山教授のリーダーシップのもと、松浦正浩先生（明治大学公共政策大学院教授）や中川善典先生（高知工科大学マネジメント学部准教授）らの若い先生方と一緒に多様なケーススタディを積極的に行う機会を得ました。そこで、多様なテーマについて特定のディシプリンによらない議論を進めることは、武者修行的な感覚でとても楽しい経験でした。また、そうした活動は、ケースメソッドを用いた学生教育や合意形成を支援するための方法論の開発につながっていきました。それらは、現在も筆者の所属している社会基盤学専攻において、講義や演習で活用させていただくとともに、研究を行う上でも重要な方法として援用されています。



残念ながら、ここ最近では AGS あるいはその後継プロジェクトから少し遠ざかってしまいましたが、当初から一貫して私達の活動を温かく見守っていただいたのが浅尾修一郎先生でした。学内でたまにお会いしたときには、いつも気さくにお声をかけていただきました。まさに浅尾先生と言えば AGS という感じの、ミスター AGS だったと思います。いろいろわがままをいう多くの先生方をうまくまとめていただいたことに感謝します。また、このような類い稀なプロジェクトを立ち上げ、若手研究者に貴重な機会を与えていただいた多くの先生方に厚く御礼申し上げる次第です。今後も AGS プロジェクトを通じて培った経験と知見を、微力ながらも次の世代に伝えていければと思っています■